



鬼方カヨコの片恋

黒ねこ作

Illustr 紅シラガ

Blue Archive FANBOOK

Blue Archive FANBOOK

リリカル・オブ・ロック

鬼方カヨコの片恋

黒ねこ作

表紙・挿絵/紅シラガ

登場人物 Characters

鬼方カヨコ ゲヘナ学園3年生 便利屋68

生まれ持った顔つきが怖いという理由だけで不良と誤解されがちだが、無口なだけで心優しい性格の持ち主。便利屋68の課長で常識人。音楽CDの収集が趣味。便利屋の仕事の合間に野良猫の世話をしている。

先生 連邦捜査部シャーレ 担当顧問

キヴォトスで希少な大人の男性。推定年齢は二十代後半。全ての生徒の味方として、仕事漬けの日々を送っている。野良猫の世話をするカヨコを見かけて以来、自分も時間を見繕って付き合うようになった。



プロローグ	006
第一話 猫と雨	010
第二話 片恋	036
第三話 リリカル・オブ・ロック	064
エピソード	084
あとがき	088

プロローグ

雨は嫌いじゃなかった。

濡れるのは嫌いだけど、他人の視線も傘があれば無視できる。別に見られて困るような理由は何もなかった。ただ、いつもの誤解でうんざりしなくて済むから楽なだけ。

あとはイヤホンをしなくても、雨粒の弾ける音が街中のノイズをかき消してくれる。

——だから私、鬼方カヨコは雨が嫌いじゃない。

今日も朝から雨が降っていた。シャレーの当番の日に降られるなんてツイてないなとか考えながら、先生の仕事を手伝って、帰りがてら寄り道をしたのが失敗だった。

「はあ……」

ザアアアと熱いシャワーの水滴が白い肌を伝って落ちていく。びしょ濡れの冷え切った身体にじわりと染みる温もりは心地いい。でも、今はリラックスできる気分じゃない。

目線を下げれば、先生の使っているシャンプーやボディソープが置かれていて、自分が先生のプライベートな空間にいるって現実を意識するほど妙な恥ずかしさを感じる。

だから不意に背後で聞こえた物音に、私は心臓が止まるかと思うほど驚いた。

『カヨコ。タオルと着替え置いておくね』

「……う、うん。ありがとう、先生」

少しだけ声がうわずったけれど、たぶん気づかれていないはず。どくんどくんと心臓の音がやけにうるさい。先生の足音が遠ざかってから、思わず止めていた息を吐いた。

先生の落ち着いた声はいつも通りで、勝手に一人でドキドキしている自分が馬鹿らしく思えてくる。まあ仕方ないか。曇った鏡を手のひらで拭い、映った姿に溜息をつく。

女らしい魅力とは無縁の貧相な身体つき。薄桃色の先端に向かってなだらかに膨らんだ皿みたいな胸を見るたび、せめてもう少し丸かったらいいのにと思わずにはいられない。うつすらと浮いた肋骨は不健康そうだし、腰にくびれがあってもお尻に厚みがないから、男の人が好きそうなメリハリのはっきりしたスタイルにはなれそうもなかった。

スレンダー、なんて褒め言葉を言われたこともあるけれど、結局それって出るところが出てないってこと。これで下の毛もなかったら、痩せ細った子供にしか見えない。

（先生も動揺するのかな？ アルみたいだったら……）

先生のタイプは知らないけれど、きつと豊満な見た目が好みに決まってる。子供っぽい外見の女の子に興味なんてないだろう。さっき洗濯機に入れた下着だってそうだ。

地味な黒のスポーツブラとパンツ。動きやすくて快適だから普段使いしているけれど、

今日くらいは女の子らしい可愛いのを着てくればよかったと後悔した。

そこまで考えてから、私はようやく気がついた。

（はあ、何を期待してるんだろう……）

これは偶然が重なっただけなんだ。朝から雨が降っていたのも、当番の帰りに寄り道を決めたのも、先生の家でシャワーを借りているのも……全部、たまたまにすぎない。頭ではわかっていた。でも、別の期待をしている自分が心の片隅にいる。

「……あり得ない。絶対に」

先生が私の身体や下着を見ても意識するとは思えなかった。私は先生にとって大勢いる生徒の一人に過ぎないだろうし、もっと魅力的な子がキヴォトスにはたくさんいる。

シャワーの勢いをちよつと強めにして頭から浴びた。

白と黒の地毛を伝って雫が落ちてゆく。馬鹿な期待が綺麗さっぱり流されてくれたらと思っただけで、先生の私物が否応なく目に入るせいでやっぱり意識してしまう。

小雨みtainな水音を聞きながら、私は目をつむって呟いた。

「本当に、どうしてこんなことに……」

第一話 猫と雨

1

シャーレの当番を終えた帰り道だった。

私はコンビニのレジ袋を手にかけて、家路と反対の通りを歩いていった。
使い古したビニール傘がずっと大粒の雨に叩かれている。

当番が終わる頃に止むのを期待していたけれど当てが外れた。朝から降りっぱなしで、
雨脚は強くなる一方だった。まあ予想が外れても帰るだけだから困らないけど……。

あの子の様子が少し気にかかっていた。

(たぶん、大丈夫だと思うけど……)

自分で考えて、好きに動ける子なのは知っている。だから余計な心配かもしれないし、
無駄足になるかもしれない。私の杞憂ならそれでいい。ただ、万が一ってこともある。
マンションや雑居ビルの並んだ裏通り。見慣れた細い路地を右に曲がった。

薄汚れたビルの壁に貼られたチラシやスプレーの落書き。表を歩く人は見向きもしないひっそりとした路地裏の隅に、ひっくり返した段ボール箱が置かれている。ガムテープで底を補強して、カッターで入り口を開けた小屋。あんまり良い出来とは思えないけれど、あの子のお眼鏡には適ったらしくて、気が向いたときに来ているようだった。

入り口でしゃがむと、三毛猫がむくりと顔を上げる。

「今日は来てたんだ」

返事の代わりに大きな欠伸をひとつ。のそつと起き上がってすり寄ってきた。

「お前は賢いね」

この子は私が来た理由をちゃんとわかっている。

コンビニの袋に手を入れて、取り出した猫缶の蓋を剥がした。

「お待たせ。食べていいよ」

足元に置くなり猫缶にまっしぐら。はぐはぐと勢いよく食べ始める。

「だいぶお腹が空いてたんだ。足りなかったら、まだあるから」

私は夢中で食べている小さな頭を指先で撫でる。

この子と出会ってどれくらい経ったのだろう。今日みたいな雨が降っていたのを鮮明に覚えている。猫は福を招くなんて言うけれど、この子が招いたのは「縁」だった。私の陰鬱な日々を一変させる不思議な縁をくれた。

もちろん、この子との出会いも大切な縁の一つだと思っている。

何かに縛られることもなく、自由気ままに生きる野良猫。この子にとつては当たり前のように生きるかもしれない。でも、独りぼっちはやっぱり寂しいような気がするから。

三毛猫はあつという間に食べきってしまった。ねだるようにまとわりついてくる。

「待って。今あげるから」

おかわりを置いて、食べ終わった容器は袋に回収する。

この子を知っている先生に「飼わないの？」ってよく聞かれる。

生き物を飼うならその命に責任を持つ必要がある。正直、この子の世話をこれから先も続けられるとは言いい切れないし、私はこの子の自由な生き方を奪いたくなかった。

まあ一番の理由は、もっと手のかかる人たちが身近にいるからだけど……。

例えば、先生。先生は私たち生徒からの相談や依頼を断らない。子供の私たちにとって先生は安心して頼れる大人だ。先生がいる、と思えるだけでも心持ちは軽くなる。

先生もそれを知っているから、自分より生徒を優先する。職責や義務感からじゃない。あの人は私たちを心から大切に想っている。どんな苦労や危険もいとわないほどに。

先生のそういうところは尊敬しているけれど、日常生活が回らないほど仕事漬けなのはどうかと思う。実際、徹夜明けにオフィスの床で力尽きた先生を何度も発見している。

最近も忙しくてカップ麺ばかり食べてるって言うから、今日はお昼にサンドイッチを

作ってあげた。普段の偏った食事を考えて、野菜は多めに入れてある。あとはシンプルに具材を挟んだだけなのに、先生は「ごちそうだ！」って子供みたいに喜んでくれた。

思いついたら口元が緩んでくる。

「まったく……大げさだよ。先生らしいけど」

あんなに喜んでくれるなら、次は本格的な料理を作ろうかな。いつそ、お弁当を作って渡すとか？ 作れる品数もそんなに多くないから、レシピを見ながら考えて――。

ぽつりと膝を濡らした雨滴で我に返る。

「はあ……」

自分の単純さに呆れた。

先生は特定の生徒に肩入れしない人だ。先生が良くも悪くも公平だから、私たち生徒は安心できる。先生のスタンスは理解できるし、私にそれを否定する資格なんてない。

ただ、私にとって一喜一憂するような出来事でも、先生の中では日々の何気ない記憶で済まされてしまう。悪気がないのはわかっているけれど、それがちょっとムカつく。

(別に意識して欲しいわけじゃないけど……)

ぽしゃっと水たまりを踏む音がして、思わず顔を上げた私は驚いた。

「先生……」

「や、カヨコ。お疲れさま」

青い傘を差した先生が目の前にいた。帰り際に見たスーツ姿のまま、先生は空いた手にレジ袋をさげている。シャーレの近場にあるコンビニの見慣れた袋だった。

「……お疲れさま、先生」

先生は困惑する私の隣にしゃがんだ。

「今日は来てたんだね、この子。雨宿りしてたのかな？」

「うん。ただ、この雨で動けなくなっただけみたい」

「そうなの？」

「お腹をだいぶ空かせてたから。たぶんね」

「なるほど。なら、おかわりは任せて！ 私も買って来たからね！」

「あつ、先生。それならもう……」

ぺろりと二個目を完食した三毛猫は、満足そうに毛づくろいを始めていた。

先生の用意した追加の猫缶には目もくれない。

「もしや、満腹？」

「おかわりした後だからね」

「くつ、タイミングが悪かったか……」

先生は残念そうにがっくりと肩を落とす。大げさなりアクションだなんて思ったけど、しょんぼりした表情を見るかぎり、わりと本気で楽しみにしていたのかもしれない。



「猫は雨の嫌いな子が多いから。きつと今夜もいるよ」

私は段ボール小屋の中に猫缶を避難させた。

「だから、これは朝ご飯になるかもね」

「それならよかった」

フォローになったのかわからないけど、先生の表情は明るくなった気がする。

三毛猫が私の膝に頭をこすりつけてきた。

「撫でて欲しいの？」

あごの下を指先で撫でると、ごろごろと心地よさそうに喉を鳴らした。出会った頃から人懐っこい子だったけれど、何度も会いに来ていたら、すっかり懐かれてしまった。

先生が猫を撫でている私を見て微笑む。

「カヨコは本当に猫が好きだね」

「別にそういうわけじゃ……」

猫の背中を撫でながら、先生から目を逸らした。

「……ただ、見に来てるだけ。放っておけなかったから」

嘘はついてない。気が向いたら様子を見に来て、この子にご飯をあげている。

この子の一生に責任は持てないし、飼い主になろうとも思わない。私に出会いをくれた恩返しじゃないけれど、この子の自由に干渉しない範囲で見守りたいだけだった。

先生がぼつりと言った。

「似てるのかもね」

「え？」

私はつられて先生の顔を見る。

「この子とカヨコ。ちょっと似てるかもって」

「私が猫みたいってこと？」

「うん。雰囲気とかね」

「例えば？」

「独りが好きなどところとか、綺麗好きなどところとか……」

先生の穏やかな瞳が悪戯っぽく笑う。

「実は寂しがり屋なところとかね」

「そんなことない、と思うけど……」

はつきりと断言できなくて言葉を濁した。

昔から独りは慣れている。だから便利屋に誘われるまでは、私にとって孤独や寂しさは日常だった。他人と関わるわずらわしさを嫌って、ひとりで良いと一時は思っていた。

便利屋のみんな、先生、シャーレで知り合った子たち。小さな縁から始まった出会いがどんどん広がって、気がつくとな誰かと一緒にいる日々が当たり前になっていた。

(猫っぽいか……)

手のひらで猫の背筋をぽんぽんと叩く。撫でられるのが心地いいみたいで、私に身体を預けてくる。私の手に伝わってくる温もりが、この子の信頼の証みたいで嬉しくなる。

バラバラと傘に当たる雨粒がさらに勢いを増した。

先生はちらっと空に視線を向ける。

「雨が強くなってきたね」

「今夜は台風が来るらしいよ」

「あー、今朝のニュースでやってたね。カヨコ、帰りは？」

「電車。駅まで行けばすぐだから」

「それなら安心かな」

「むしろ、先生が心配だよ。今から戻って残業しないよね？」

「大丈夫！ 締め切りの近い仕事は片づけたからね！」

「……本当に？ ちゃんと確かめた？」

「信用ないなあ」

「普段の行いじゃないかな。タスク管理とか」

「……耳が痛い。当番のみんなには申し訳ないといつも思ってるよ」

先生が情けない顔で項垂れる。ちよっと言い過ぎたかなと心配になった。

「別にいいよ。先生が大変なのは知ってるから」

「カヨコは優しいね……」

あの子はいつの間にか、段ボール小屋の中に戻って丸くなっていた。

「撫でてもらって満足したのかな？」

「かもね……」

風も強くなってきたみたいで傘の骨が小さく軋む。

私は先生と一緒に立ち上がった。

「濡れないうちに帰ろうか。カヨコの袋も持つよ」

そう言って、先生は私のレジ袋を自分のと一緒にまとめてくれた。

「……ありがとう。別に重いものでもないのに」

「気にしないで。駅まで送るよ」

「大丈夫だよ、先生。そんなに遠くないから」

「じゃあ、途中まで一緒に帰ろうか？」

先生の澄んだ瞳に真っ直ぐ見つめられる。

「カヨコとの時間も大切だからね」

「っ……」

不意打ちみたいな言葉が飛んできて、私の頭の中は真っ白になった。

バクバクと心臓の音がうるさい。先生の言葉を脳内で反芻する。特別なことじゃない。わかってはいるけど、やっぱり意識してしまう。さつきから頬が熱くてしょうがない。

先生が微笑を浮かべた。

「カヨコが嫌じゃなければね？」

そういう言い方はずるい。断れるわけじゃないじゃん。

「……好きにすれば」

先生から視線を逸らした。このまま見つめ合っていたら、理性がとろけてしまいそうで危険な気がする。うっかり感情に任せて変なことを口走ったら目も当てられない。

私は深呼吸をしてから振り向いた。

「それじゃ行こうか。先生」

第二話 片恋

2

私はカーテンの隙間から外の様子を確かめた。

「……のんびりしすぎた。だいぶ荒れてる」

窓ガラスに横殴りの雨が激しくぶつかっている。高々と宙を舞っているゴミや落ち葉、大きく揺れる電線を見れば、唸るような音で吹いている風の強さがよくわかった。

カーテンをきちんと閉めて、スマホの乗り換えアプリをタップした。

「電車、ちゃんと動いてるかな……」

先生が私の右隣に来て、自分のスマホ画面を見せてくれた。

「ダメそうだね。ほら、全線で運休だって」

「ほんとだ。二分前の更新か、っ……」

先生の顔がすぐ横にある。ちよつと背伸びしたらキスできそうな近さ。

咳払いを一つ。ソファアの左端までゆっくりと下がった。

「……徒歩で帰るよ」

スマホを確認したら三時間くらい経っていた。先生との話に夢中で長居してしまった。乾燥もとくに終わっているはずだから、帰り着くまでに服が濡れても何とかなる。

先生が心配そうな表情でソファアーに座った。

「今から歩いて帰るのは危ないよ。泊まっていたら？」

（…………泊まる？ 先生の家にな？）

頭の中で理解した瞬間、心臓が大きく跳ねた。

先生はリモコンでテレビをつける。

「これから悪化するらしいからね。電車も朝には動くんじゃないかな？」

徒歩で風雨に曝されて帰りたくはなかった。でも、帰りを先に延ばしたのは自業自得。

先生の氣遣いは嬉しいけれど、それに甘えて迷惑をかけるのは身勝手だと思った。

「……大丈夫だよ。そこまで遠くないから」

先生は私の心中を見透かしたように苦笑を湛えた。

「遠慮しなくていいよ。カヨコに何かあったら心配だからね」

そういう言い方はずるい。ここで断ったら好意を突っぱねることになるし、私も先生を心配させたくないって思うから、罪悪感とか申し訳なきを無視するしかなくなる。

私は小さく頭を下げた。

「……なら、お言葉に甘えて。よろしくお願いします」

「こちらこそ。自分の家だと思ってくつろいで」

「うん。ありがとう、先生」

先生の右隣に腰を下ろして深呼吸をする。

（……ただ泊まるだけ。やましい気持ちはない）

暴走しがちな妄想に釘を刺して、スマホの画面ロックを解除した。

（みんなにも連絡入れておかないと……）

モモトークの通知が溜まっている。便利屋のグループチャットを開くと、アルの指示に始まって、ムツキのキャラスタンプやハルカの長めな返信がずらっと並んでいた。

今日の業務報告を簡潔に打ち、送信する寸前で指先を止めた。

（さすがに……これはダメだ……）

——『先生の家に泊まって始発で帰るから』

これじゃ妙な憶測と誤解が生まれる。何度も文章を直してみたものの、どれも明らかに意味が正しく伝わらない。前後の経緯も合わせて書き換えたら余計に悪化した。

（みんなには悪いけど仕方ないか……）

——『シャーレで残業中。泊まり込みになると思う』

心の中で謝ってから送信を押す。アル、ハルカに続いてムツキの返信が飛んできた。

『わかったわ！ 先生をしつかりサポートするのよ！』

『お疲れさまです！ 頑張ってください！』

『えゝ、残業なんてかわいそゝ！ 頑張つてねゝ！』

ほっと胸を撫で下ろした。嘘も方便とは言うけれど、やっぱり罪悪感拭えない。

(……明日、みんなの好きなラーメンを奢ろう)

スマホをテーブルに置いたところで、テレビのニュース番組が目に入った。

『台風10号に関する最新の情報をお伝えします。現在、非常に強い風雨を伴って接近する台風10号ですが、今夜から明日の未明にかけて通過する見通しで、中心の気圧は——』

雨音の大きさが増している。強風を受けて窓もガタついていた。歩きで帰っていたら、使い古しのビニール傘は役に立たなくて、嵐に曝されながら進むしかなかった。

河川の増水や土砂災害の警報、交通の乱れ……深刻なテロップが次々と流れてきた。

先生は真剣な眼差しでそれを見ている。

シャーレの先生として考えている時の顔だった。被害の大きい学園の支援とか、生徒のケアとか、明日やることをまとめているのかもしれない。

私は嘆息した。そうやって先生はいつも一人で抱えようとする。

「手伝うよ。先生」

「えっ？」

「明日も色々やることもあるんじゃない？」

先生は後ろ頭を掻いた。

「……顔に出てた？」

「思いつきりね。人手は多いほうがいいでしょ？」

「ありがとう。助かるよ」

先生が微笑を湛える。リモコンでチャンネルを変えた。

映ったのはバラエティ系だった。司会者がゲストのタレントたちにツッコミを入れて、スタジオに笑い声が響く。司会者が視聴者の寄せたお題を示して、タレントたちは裏話や秘密を披露する。司会者やタレントの掛け合いが中心のトーク番組のようだった。

番組が違うから落差もすごい。さっきまでのニュースが遠いどこかの話に思えてくる。

「先生、バラエティとか見るんだ」

「たまにね。カヨコは？」

「あんまりかな。アルはよく見てるけどね」

司会者がランダムで選ぶ次のお題は「恋愛」だった。

ベテランの男性俳優が軽妙な語り口で始める。理想の恋愛観と現実のギャップ、過去の失敗談、二度の結婚と破局……テンポよく喋るから興味がなくても話は入ってくる。

先生が遠い目をして「恋愛かぁ」と呟いた。

「カヨコは？ 好きな人とかいないの？」

「……………は？」

完全に意表を突かれて思考がフリーズする。

「ほら、カヨコはモテそうだって。可愛いからね」

「かわ……………いい？」

頭の中で山びこみたいに反響した。瞬間湯沸かし器みたいな早さで身体中が熱くなる。心臓がめちやくちやに暴れて飛び出そう。色々な感情が衝突事故を起こしていた。

頬が赤いのを自覚しつつ先生を睨む。何とか声を絞り出して抗議した。

「…………ふざけないで、先生。からかってるなら怒るよ？」

「え、本心なのに…………」

先生は唇を尖らせてから、小さく笑って両肩を竦める。

たぶん軽い雑談のつもりだろうけど、私には先制パンチの奇襲と変わらない。このままやられっ放しは悔しかった。先に仕掛けてきたのは先生だ。なら、こっちだって――。

「…………先生は？ 気になる子とかいないの？」

「はい？」

先生は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「先週、百鬼夜行の子に告白されてたよね？」

「えっと……聞かれてた？」

「先生を探してたら偶然ね」

夕方、シャーレの休憩室。盗み聞きするつもりはなかったけど、たまたま通りかかったタイミングで一部始終を聞いてしまった。だから、先生の答えも知っている。

「誰かと付き合わないの？」

「……私は先生だからね」

イエスでもノーでもない、煙に巻くような曖昧な答え。先生らしいなとは思うけれど、はっきりと否定してくれたら、このモヤモヤした気持ちも少しは晴れるのに……。

私はダメ元で鎌をかけてみた。

「ふーん……他に好きな子がいるとか？」

ほんの一瞬だった。わずかに目を泳がせて、先生は穏やかな笑みを浮かべる。

「いやいや、そうじゃないよ」

「……そう」

胸の奥に鉛の塊を押し込まれたような気分だった。

別に予想外ってわけじゃない。先生と仲の良い子は大勢いるし、先生を好きな子だってたくさんいる。だから、先生が私たちの誰かを好きになることもあると思っていた。

相手は誰なのか？ 知りたいように知りたくない。でも、やっぱり気になる。

気持ちのモヤモヤが余計に悪化した気がする。小さく溜息をついたときだった。

——ゴロゴロッ！

突然、轟音が鳴り響いた。リビングが一瞬で真っ暗になる。

「停電かな？」

落雷でブレーカーが落ちたらしい。テレビやエアコンの電源が切れて、家中の明かりも消えている。スマホでライトを点けようと、私はローテーブルに向かって手を伸ばす。

先生の立ち上がる気配がした。

「ちよつと待つてね。スマホはどこに置いたっけな……」

私の腕に勢いよく何かが引つかかる。ごんつと鈍い音がして、先生の呻き声がした。

「先生？ 大丈夫？」

ソファアールから動いた拍子に、私も足を取られてバランスを崩した。

「——きゃっ！」

条件反射で手を前に伸ばす。ドンッ！ ぶつかった衝撃が走る。

「ぐえっ!？」

「あつ、ごめん……」

腕か膝が直撃したのかもしれない。目が暗さに慣れていないから、下手に慌てて動く二次被害を出しそうな気がする。でも何だろう？ 床にしては温かいような……。

リビングの照明が前触れもなく戻った。眩しさに目を眇める。

「えっ？」

私は馬乗りで先生を敷いていた。先生の足につまずいてから、折り重なるように倒れて受け止められた……らしい。先生の胸板に触れている手のひらがその証拠だった。

先生の戸惑い顔が鼻先にある。お互いの吐息が触れるような近さ。

「……カヨコ？」

「……………」

私は声を出すのも忘れて、時間が止まったみたいに動けなかった。

正直、私が先生を襲っているようにしか見えない。なら、このままキスして先生の唇を奪ってしまおうか？ 他の誰かに奪われて後悔するなら、ここでいっそのこと――。

「あの、カヨコさん？ そろそろ下りてくれたら嬉しいな、なんて……」

先生の声で我に返った。どんどん顔が熱を帯びてくる。

「こっ、これは事故っ！ ただの事故だからっ!!」

脱兎のごとく下りて、私は自分の無実を訴える。

先生は気圧され気味に頷いてくれた。



「そ、そうだね……事故だね……」

「だから忘れて……」

穴があつたら今すぐ入りたい。不埒な欲望ごと地下深くに埋めて欲しかった。

先生が私の肩に触れる。

「怪我がなくてよかったよ」

「先生……」

「だから気にしないで。カヨコの可愛い声も聞けたしね？」

「……っ」

思い出したら恥ずかしすぎて、先生の脇腹に軽く肘鉄を入れる。

「ぐふっ！」

私は悶える先生を放置して、トイレの中に逃げ込んだ。

（はぁ……何やってるんだろう）

ドアの鍵を閉めて、壁にもたれかかる。

先生に意中の子がいると知って、認めたくない気持ちと焦りから自分を見失っていた。

他人に奪われるくらいなら、と先生の心に爪痕を残そうとした。本当に最低だ。

大きな溜息が漏れる。自己嫌悪でいっぱいだった。

（相手が誰かもわからないのに……）

便利屋のみんなはどうだろう？ アルやムツキ？ ハルカとか？ あるいは――。
胸中の淡い期待を一笑に付した。

(……まさかね)

私は先生の特別になれない。だから絶対にありえない。

リリカル・オブ・ロック

鬼方カヨコの片恋

【発行日】

2025 年 8 月 16 日 初版発行

【発行者】

黒ねこ作（黒猫機関）

Email : projectblackcat2011@gmail.com

Twitter : (@gretelproject) pixiv ID: (13552389)

【イラスト】

紅シラガ

Twitter : (@Shiraga_kuro) pixiv ID: (8809344)

【装丁デザイン】

船木渡（FLOSHIKI DESIGN）

<https://floshiki.com>

【印刷・製本】

有限会社あかつき印刷

<https://www.akatsuki-insatsu.co.jp>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写（コピー）することを禁止します。また、本作品は二次創作フィクションであり、実在する個人、団体、歴史、原作とは一切関係ありません。